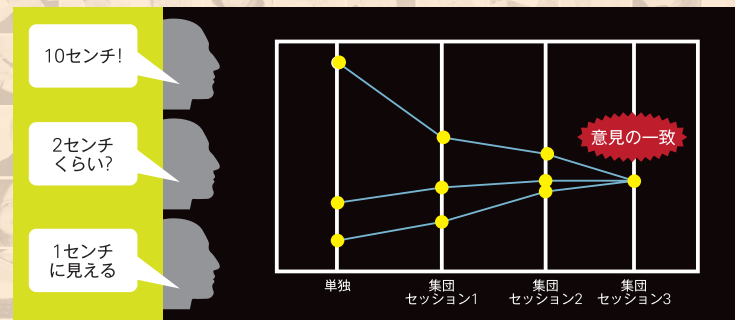




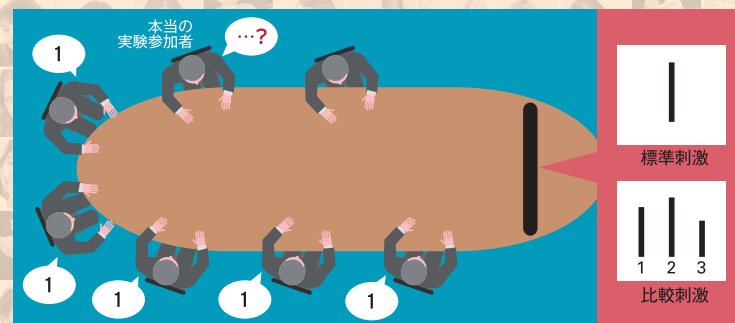
### シェリフの同調実験

実験参加者は、暗い部屋の中で光点の動きの長さを判断しよう求められる（実際には光点は静止しているが、暗闇の中では動いているように見えるため、長さの推定には個人差が出る）。正確な答えがわからない状況において、単独で推定すると答えに大きなばらつきが見られるが、集団で推定することを繰り返すと、次第に答えが収束していく。



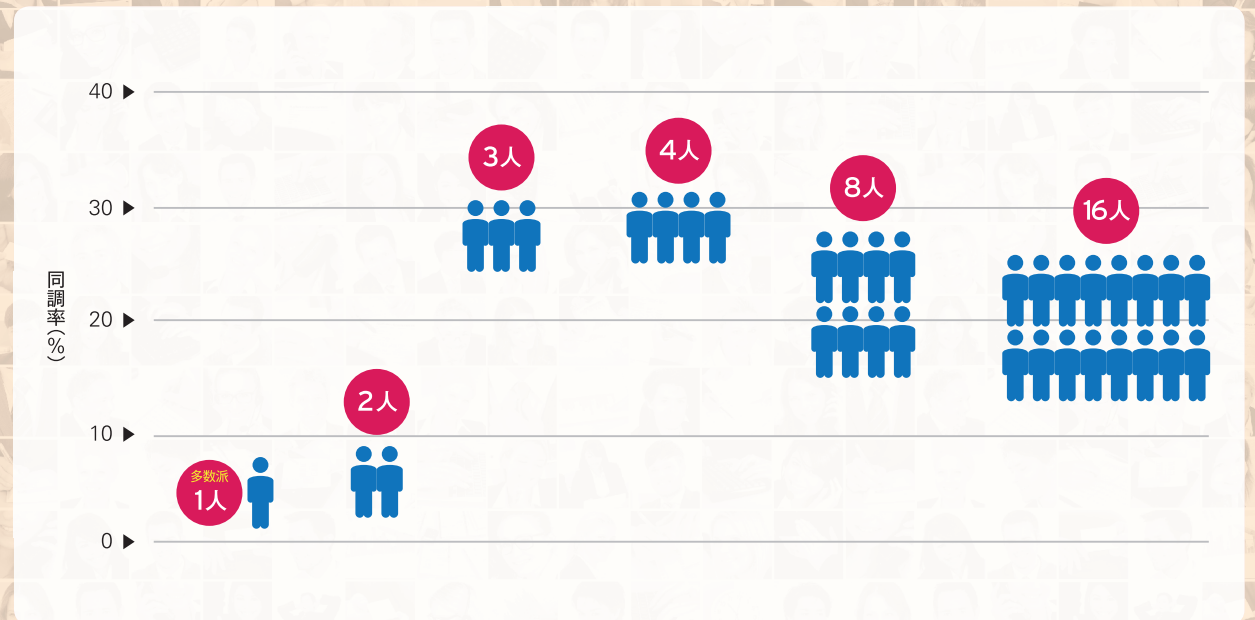
### アッシュの同調実験

標準刺激の線分と同じ長さの線分を比較刺激から選ぶ。正常な視力の持ち主であれば、ほぼ正解することができる簡単な課題である。実験参加者は7人であり、1人ずつ順番に回答していく。本当の実験参加者は6番目に回答する人で、その他はサクラだ。



### 多数派の人数と同調率の関係

同調率は多数派が3~4人のときに40%近くまで高まり、多数派がそれ以上増えてもあまり変わりはない。これは逆に考えれば、6割の人は、多数派に流されることなく自分の意見を貫き通すことができるということだ。



人間は、しばしば社会的動物と称されるように、集団の中で生きている。ひとたび集団に所属すると、そこに所属しているメンバーは互いに考え方や価値観が類似するようになる。これは、集団のメンバー同士が相互作用を行うことで、やがて集団内に多数派が形成され、少数派はそれに合わせて振る舞うようになるからである。このことを同調と呼ぶ。

#### ◆7人中6人がわざと誤答したら？

同調に関する古典的な実験として、1935年に報告されたムザファ・シェリフによる知覚の自動運動現象の実験を紹介しよう。知覚の自動運動現象とは、暗い部屋で光の点をじっと見ていると、実際には動いていないのに動いているように見える現象のことである。この実験では、まず1人で暗室に入って光点の動きの長さを報告してもらう。その後、3人1組で暗室に入ってもらい、同じように動きの長さの報告を

求める。すると、報告された長さは、最初はバラバラであったが、回数を重ねるにつれて同じ長さになってくる。このことは、他のメンバーに影響されて、みんなが同じ長さに合わせたという現象を示している。

また、同じ同調を明らかにしたのものとして、1955年に報告されたソロモン・アッシュの実験がある。この実験は、視覚実験と称して、7人1組の集団に対して行われた。実験参加者には、まず標準刺激として1本の線分が提示され、後に比較刺激として3本の線分が提示され、そしてその3本の中から先に示された標準刺激と同じ長さの線分を選ぶという課題が与えられた。この課題は通常、99.3%が正解するという非常にやさしい課題であった。

さて、7人が順番に回答していくが、実は7人の参加者のうち6人がサクラであり、課題12試行中7試行で全員同じ「誤答」をするよう実験者から指示されていた。本当の実験参加者は、6番目に発言することになっている。みなさんが

この実験に参加していたら、どのように回答するだろうか。正解がわかっていたとしても他の参加者に合わせて間違った回答をするだろうか？ それとも、自分の信念を貫き正しいと思う回答をするだろうか？ 実験の結果は、本当の実験参加者のうち、およそ37%の人が1度は誤った回答をしていた。

真の実験参加者が誤った回答を行う同調行動は、サクラ全員が一致して誤答したときに最も多く見られた。サクラの1人でも正しい回答をすると、本当の実験参加者の同調行動は大幅に低下したことも明らかになっている。このことから、集団への同調は、集団内に多数派が存在するから生じるのではなく、多数派が一致した行動をとるとき、斉一性への圧力が高まり同調が起こりやすくなることを意味している。また、アッシュは、多数派が何人いるときに最も同調行動が高まるのか、多数派の人数を操作しながら検討している。その結果、多数派が3人あるいは4人のときに同調

率は最も高まり、その後は、多数派の人数が増えたとしても同調率の増加には効果が見られないことを明らかにしている。

#### ◆同調が生じる2つの影響過程

なぜ同調が生じるのだろうか。社会心理学者のモートン・ドイチュとハロルド・ジェラードは、2つの影響過程を指摘している。1つは、集団の他のメンバーから好かれたい、あるいは嫌われたくないという理由から同調するものであり、集団の多数派の意見に合わせる規範的影響である。先のアッシュの実験はこれに該当する。もう1つは、正しい情報を得たいという気持ちから、集団の他のメンバーの意見を受け入れる情報的影響である。これはシェリフの実験が該当するだろう。

(池田 浩)